

志戸呂窯にみる天目茶碗の変遷について

柴 垣 勇 夫

はじめに

鎌倉・室町時代に瀬戸窯で発達をみた施釉陶器生産は、15～16世紀に2度にわたって、中部地方各地に拡散する現象をみせる。一つは、15世紀中ごろ以後の窖窯末期の頃でありもう一つは、16世紀後半ののちに瀬戸・美濃地方の古文書にいう瀬戸山離散の時期である。中世における施釉陶器生産が、2世紀半にわたって瀬戸という限定された地域でのみ生産されていたのが、15世紀代に入って、尾張から移動し、周辺部の三河山間部や東濃地方に生産が拡散する。そして、その一派が15世紀後葉に遠江国（静岡県榛原郡）金谷町の間部に飛び火的に移動し短期間の生産を展開した。それから1世紀近くの間を置いて、16世紀後半の安土桃山時代に再び瀬戸・美濃地方からの陶工の移動によって金谷町志戸呂地区での施釉陶器生産が再開された。後者の段階以後を通常、志戸呂焼と呼んでいるが、前段の時期を含めて、金谷町志戸呂窯での施釉陶器生産の実態について、天目茶碗の形態変遷を一つの手がかりとして、眺めてみようと思う。

1. 窖窯末期にみる三ツ沢窯製品の特徴

(1) 志戸呂地区への施釉陶器生産窯の移入

15世紀の中頃、窖窯段階の末期に、尾張瀬戸地域から陶工の移動が起ったようで、最初に三河部藤岡町地区への移動がみられる。そして、ほぼ平行して東濃地方への移動がおこり、特に妻木川西部の土岐市西山丘陵を中心に、南北に土岐川を越した五斗時地区まで、ほぼ土岐市内に限定して築窯されている。のちの大窯がかなり広範囲に分布をみせるのとは異なる分布状況を示している。こうした移動の最末期に、遠く離れた遠江国のしかも東端の榛原郡金谷町横岡の谷奥に築かれたのが三ツ沢窯である。

標高210～215mの、台地形丘陵東斜面に築かれた古窯跡で、昭和63年1月の静岡県教育委員会による窯業遺跡総合調査の一環として実施された発掘調査の結果、分焰柱をもつ焼成室残存最大巾2.2mの窖窯（残存長3.5m）が検出されている。^(注1) 燃烧室側面と焚き口には比較的大型の河原石が積まれ、壁を構築、補強していた。^(注2) 窖窯末期の瀬戸窯および周辺地区の古窯跡と類似の構築方法である。ただ、窯体焼成室の形態は、やや小型で、しかも焚き口から向って左側窯壁部分が不規則であり、この時期に一般的に見られる焼成室平面が二等辺三角形という図式には、本窯はならない点、瀬戸窯とまったく同一というわけではない。

焼成している製品は、大半が施釉陶で、報告されているものには、天目茶碗、水滴、水注、緑釉小皿、瓶子、蓋、甕（四耳壺？）、擂鉢、鉢、おろし皿等で、量的には、圧倒的に擂鉢が多く、次いで小皿が多いという。なお、直径が10cmと20cmの2種の焼台がみられ、大量の匣鉢、窯道具も検出されているが、特に縦長の長大な匣鉢が目をひく。

当館には、昭和63年に磐田市在住で当館の資料調査員であった故鈴木幸朗氏から寄贈を受けた三ツ沢窯の表面採集資料があり、報告されているもの以外の遺物も含まれていることから、以下にこれを紹介する。

○天目茶碗（第1図1～6）

口径10.8cmから12.5cmまでのもので、高さは、推定で6.0cm程度とみられる。高台は寄贈品にはないが、発掘調査例からみて、ほぼ内反り高台ばかりと見られる。

口縁の作りに2種類あって、天目茶碗の形態が、細部にわたって瀬戸・美濃窯のそれを踏襲していることが判る。すなわち、やや丸味をもった体部から垂直に近く立上がる口縁部に移り、さらに口唇部を大きく外反させ、先端を尖らせたもの（Ⅰ類第1図1～5）と、やや丸味をもちつつも比較的直線に近い体部からほぼ垂直に立上がり、外側を少し屈曲させながら口唇部をそのまま丸くおさめたもの（Ⅱ類、第1図6）とがある。Ⅰ類の口唇部外面は、巾広の、薄く膨んだ玉縁状をなし、同内面は平坦面をもちつつ下方で鋭く屈曲しており、S字形の断面も傾斜のきついものとなっている。

すべて鉄釉であるが、黒褐色を呈するものや、釉が融けきらず黄褐色のかせた状態のものなど、さまざまである。下半部は露胎でへう削りが認められるが、その表面が赤褐色から暗褐色を呈して、鉄釉の褐色がまじった色調とともに、志戸呂窯製品の特徴をよく示すものである。

○縁釉小皿（第1図7～10）

口縁内外を7～8mmほど釉掛けしたもので鉄釉、灰釉（第1図10）の2種類がある。口径9.5cm～11.0cm 高さ2.0cm前後のものが多いが、3.0cmを測る深いもの（第1図10）もある。底部は糸切り未調整のものと、削り出しの浅い高台をみせるものがある。

○平碗（第1図11, 12）

口径14.2cmの灰釉平碗で、直線的な体部にわずかが鋭く外反させる口縁部をもつ、先端の尖った口唇に作るもので、黄緑色の光沢のある灰釉がかかる。外面下半は、天目茶碗等と同様、志戸呂窯特有の赤褐色を呈する。底部は、糸切り底を輪高台に削っているが、浅く作っていて、高台畳付けには糸切り痕が残っている。

○おろし皿（第1図13, 14）

口径11.6cm、高さ推定3.0cm前後のもので見込み全面に鋭い工具でおろし目を刻んでいる。13は、鉄釉を外面が底部近くまで、内面は口縁1cm前後だけ掛けていて、おろし目部分は無釉となっているが、14は、見込み全面に薄く灰釉がかかり、体部中位の内外面に濃く灰釉がかかっている、二度掛けしている様子がかがわかる。見込み部に灰釉がかかるが、薄いので、おろし目も用をなす訳である。なお、口縁には片口が付くものと思われる。

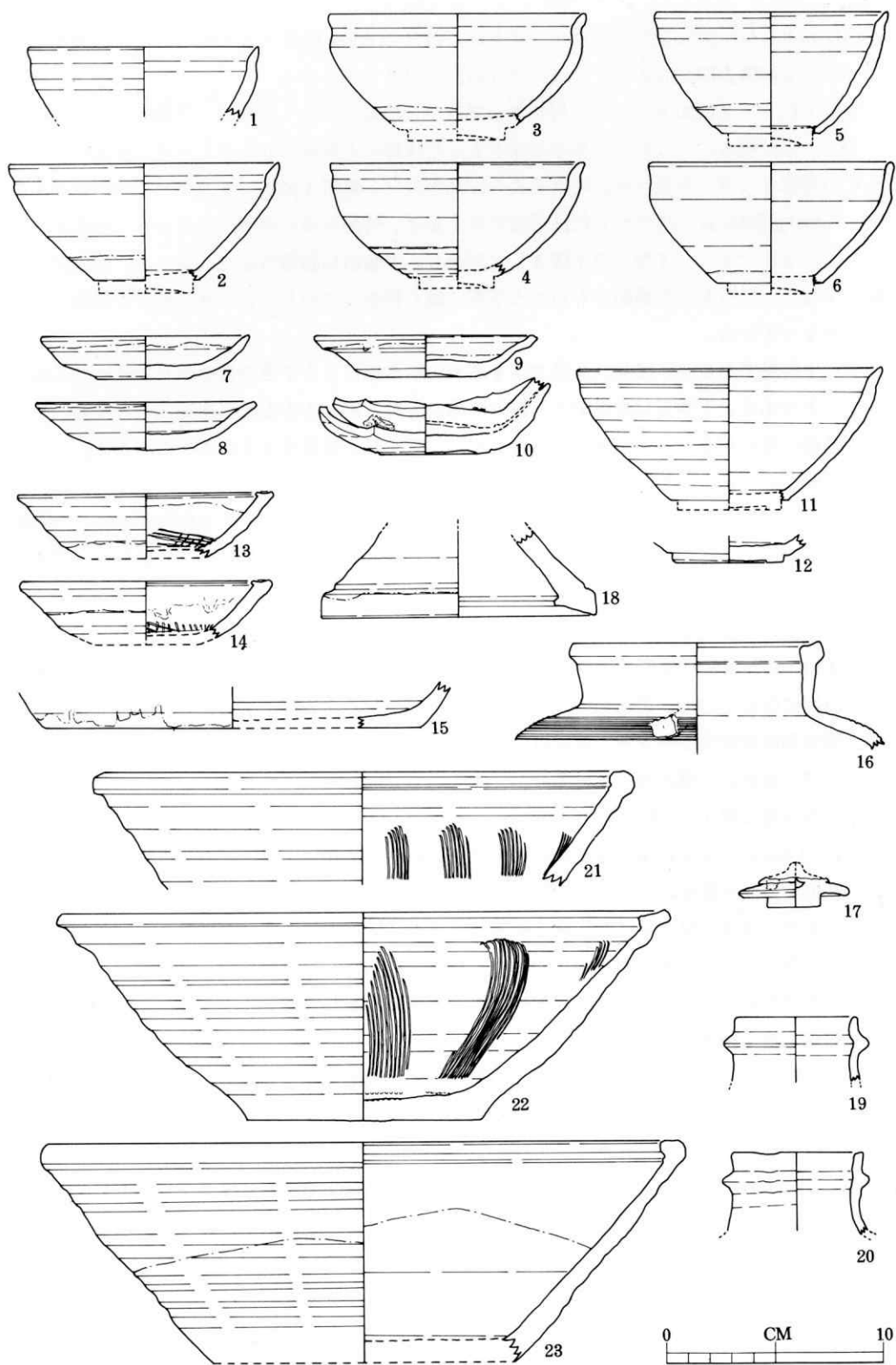
○播鉢（第1図21, 22）

播鉢Ⅰ類（21）は、口縁を折り返し、内面に小突起の帯を作るもので、おろし目は10～11本の櫛目で見込み底部近くから口縁にむけて施文している。明瞭でないが薄く鉄釉がかかっていると思われる。

播鉢Ⅱ類（22）は、口縁を丸く作りかつ、先端部を内面上方に膨らませているもので、次代の火窯期に出現する縁帯状の口縁をもつ播鉢につながるものと思われる。おろし目は6～7本の櫛状具で施文している。薄く鉄釉がかかっている。

○深皿（第1図23）

直縁大皿とすべきかも知れないが、深皿形態で、口縁を内面に折返し気味に作っているもので、播鉢Ⅱ類より一段と口縁内部への膨らみが多い。体部中位まで内外に鉄釉を薄くかけている。口径29.2cm、高さ推定10.2cmの大型のものである。



第1図 金谷町横岡三ツ沢古窯表採品実測図

○壺、瓶類（第1図15, 16, 18～20）

四耳茶壺の底部と思われる体側部外面に鉄釉が掛かったもの(15)のほか、双耳ないし四耳の付く広口壺（口広有耳壺）(16)、根来型瓶子の鉄釉の掛かった脚部（18）、梅瓶型の瓶子の灰釉の掛かった口頸部片（19, 20）が出土している。なお根来型瓶子には、灰釉のものもあり、肩上部に波状文の施された小片が出土している。

○その他（第1図17）

双耳小壺の蓋があって、無釉のようであるが、つまみから蓋上面に灰釉が一か所流れている。

以上が、当館に所蔵されている三ツ沢窯の主な表採品であるが、天目茶碗の特徴および挿鉢Ⅱ類、深皿等の存在から瀬戸窯における窰窯最末期の菊畑窯などに類似する器種構成を示している。

この三ツ沢窯の窰体構造は、比較できる同時期の瀬戸窯の例がないが、焼成室の傾斜が三ツ沢窯では 36° 強の勾配を示し、一時期古い藤岡町笹窯の焼成室傾斜 35° と類似する。しかし、笹窯焼成室最大巾は 3.15m と大型である点で異なる。次期の大窯Ⅰ期の瀬戸市小金山窯でも推定最大巾 2.84m であり、瀬戸窯に比べ小型の窰体の導入とみられる。

(2) 三ツ沢窯の天目茶碗

第4図の天目茶碗変遷図は、志戸呂窯における天目茶碗の変化を瀬戸・美濃窯にみられる天目茶碗と比較したものであるが、その最上段は、瀬戸市菊畑窯にみられる天目茶碗である（第4図左1, 2）。口縁の屈曲するⅠ類と、直立気味に立ち上がり、口唇部を丸くおさめるⅡ類の2種があり、その形態とほぼ類似するものが、三ツ沢窯にも認められる（第4図右1, 2）。

こうした2種の天目茶碗は、必ずしも明瞭に区分できるものばかりではないが、製品全体の比較の上で、Ⅰ・Ⅱ類の口縁部の差がほぼ15世紀前半ごろからあらわれる。瀬戸市小長首窯の天目茶碗に口唇部の作りは同じような先尖りをみせながら、以下の体部へのつながりが、強いS字状の屈曲を示すものと、わずかに内彎気味の曲線のみせながら段をなすようなものとの2種があり、ともに輪高台が削り出されている。それぞれが、天目茶碗Ⅰ類、Ⅱ類の初現的なものと思われるが、次の段階に位置付けられる瀬戸市山口八幡2号窯（15世紀中葉）では、明瞭に違いが認められるものが出現する。

山口八幡2号窯出土の天目茶碗Ⅰ類は、小長首窯ほどの屈曲度ではないが口唇部の屈曲して外反する様子が認められる。丸味をもった体部が、口縁近くで立ち上がり、すぐに外反して先尖りの口唇部に至る。量的には少ない。

Ⅱ類は、Ⅰ類よりも直線的な体部で、口縁部を巾広に立ち上がらせている。なお、高さには若干のばらつきがみられる。高台は、内反り高台が主体となるが、斜めに削り込む状況は、比較的浅い。

菊畑窯の段階（15世紀後半）でもこの2種の天目茶碗が引続き生産されるが、量的には、Ⅰ類が大半を占めるようである。この段階には、2種ともまた体部が丸味をもった器形となるが、Ⅱ類に若干直線的な傾向がある。

この菊畑窯段階と極めて類似した器形の傾向を示すのが、三ツ沢窯である。

Ⅰ類の第1図1および3～5は、体部が比較的丸味をもって作られ、口縁部寄りではほぼ垂直に立ち上がり、斜め上方にゆるく外反する。これに対し、同じⅠ類でも第1図2は、やや直線的な体部に、屈曲度の激しい口縁部となるもので、外反の角度も 45° に近い。

Ⅱ類の第1図6は、直線的な体部が口縁近くで垂直近くに立ち上がり、巾広な口縁部分を作っているもので、この口縁部が若干内彎気味の形態をとりつつもほぼ真っすぐに立つ。口唇部は、Ⅰ類が鋭い先尖りとなって、外側を丸く玉縁状に作るのに対し、Ⅱ類は、口唇先端を丸く作っている。高台部分をもつ陶片は、館蔵資料になく、静岡県調査で出土しているものは、内反り高台のもののみである。従って、Ⅰ、Ⅱ類ともに内反り高台と思われる。

このように、天目茶碗の形態にⅠ、Ⅱ類の2種が生まれ、ほぼ15世紀中頃に生産の定着化が進んだ。

ところで、この天目茶碗の2種の形態の違いは、何に起因するのであろうか。

瀬戸窯における施釉陶器の主要器種は、12世紀末以来、中国陶磁の模倣を一貫して続けて来た。特に鎌倉政権下の武士階級、寺院勢力への供給を目的として生産されたものには瓶子、水注、盤、洗、香炉、合子、花瓶、四耳壺、広口壺等々多器種にわたる。そうした中で13世紀末から14世紀にかけて新たに天目茶碗、茶入が加わり、建盞と呼ばれる中国福建省建窯産の天目茶碗の模倣が始まる。赤塚幹也氏は、試作段階の天目から古瀬戸釉段階の天目へという、釉調の安定化の現象の中で発展段階をとらえ、特にここにいうⅠ、Ⅱ類は、古瀬戸釉天目茶碗の段階の中での器形変化をとらえ、同時存在とはせず、時期差とされ、ほぼ室町時代中期段階のものとした。

ところで中国産天目茶碗は、明代に入ると抹茶法が廃たれ、建盞が顧みられなくなり、建窯も徐々に廃絶するに至るといふ。

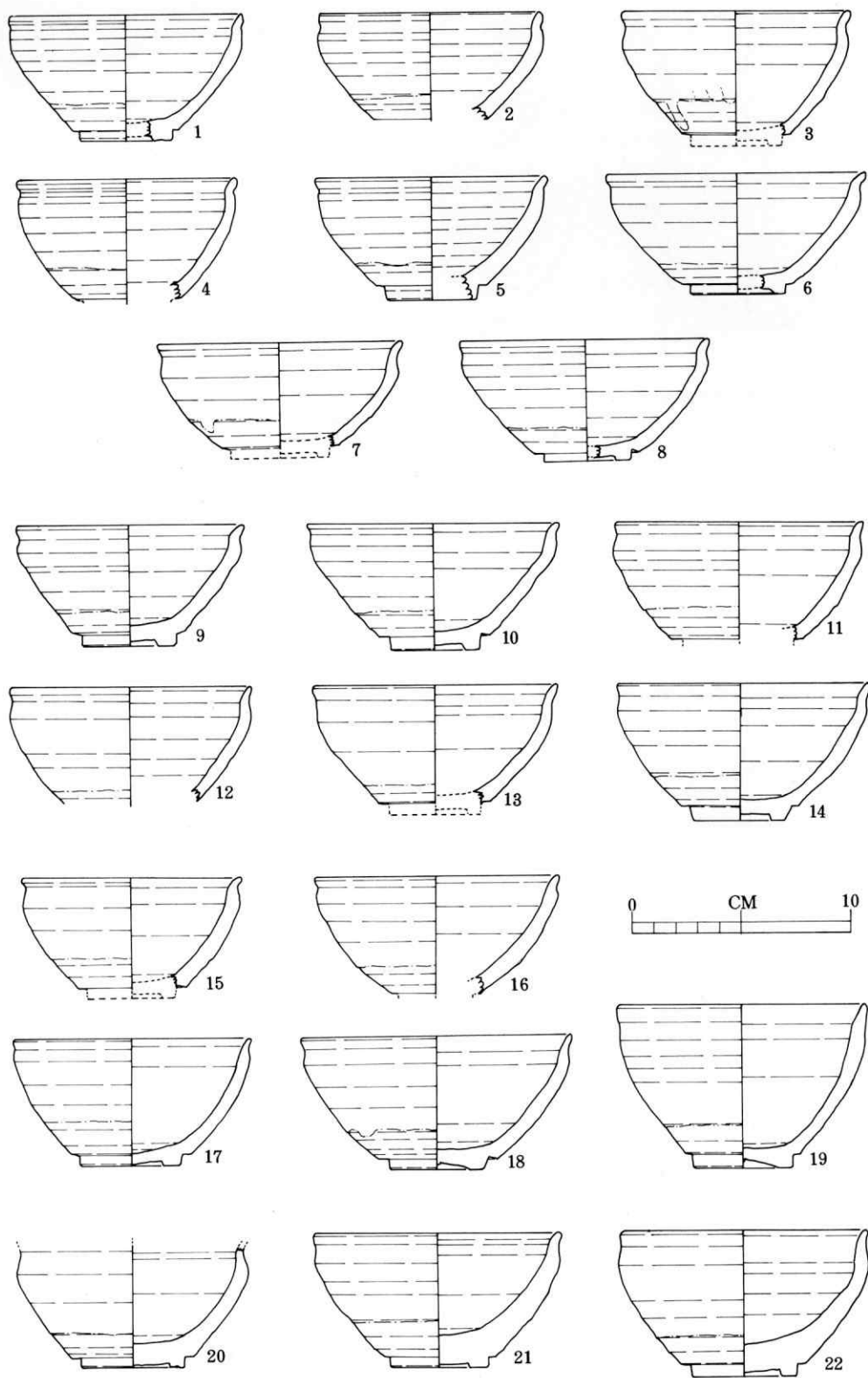
一方、日本への天目茶碗の輸入は、鎌倉・室町時代を通じてかなりの量にのぼったようで、そうした請来品の中には、貴重視され、かつ愛玩された優品が数多く伝世されている。そうしたものの生産時期や請来時期の検討が必要ではあるが、一般に最も多く流通した禾目天目と呼ばれるものの形態にみられる口縁部の屈曲して外反するタイプが、瀬戸窯で生産が開始された初期の天目茶碗から引続き生産されるⅠ類のタイプの天目茶碗の本歌とみられるものである。15世紀に入って新たに誕生するⅡ類のタイプの天目茶碗は、内反り高台の出現という現象とあわせて、新たに模倣する中国産の天目茶碗の存在が考えられるが、すでに建窯の衰退が始まり、建窯以外の産地の天目が請来されたとみられ、唐物中心の茶法も佗茶へと変化を見せはじめる中で見直される灰被天目のタイプがその可能性のあるものといえよう。そして、草庵の茶、佗茶の盛行とともに、天目茶碗の量産が次の大窯期以後、急速に進むこととなる。三ツ沢窯の天目茶碗もそうした傾向の一時点を示しているのであろう。

2. 大窯期にみる志戸呂窯の天目茶碗

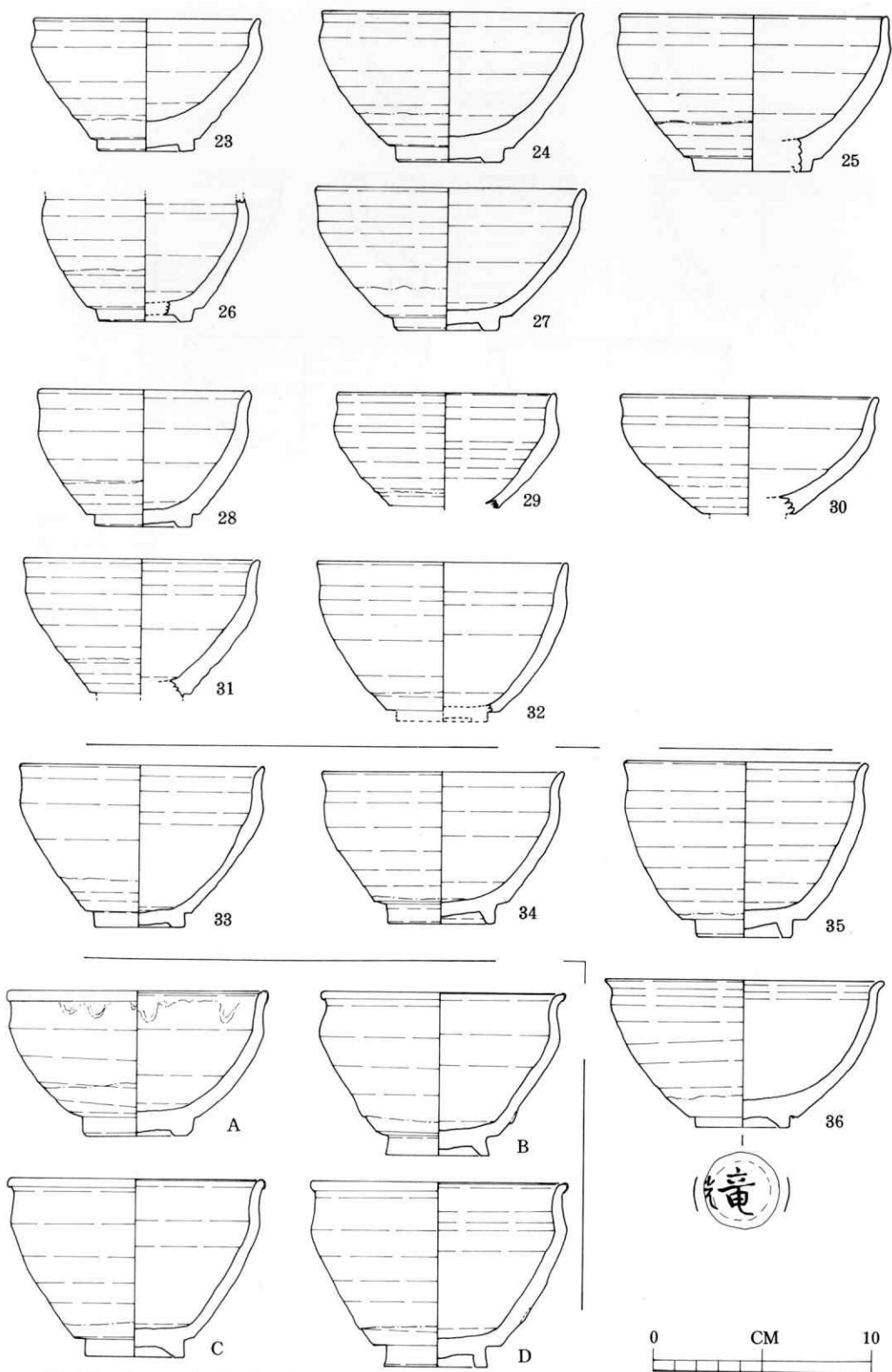
(1) 上志戸呂窯の天目茶碗

15世紀後半に三ツ沢窯が築窯され、短期間の生産がなされたあと、この志戸呂の地（但し、三ツ沢は、旧横岡村）での窯業は、しばらくの間、姿を消す。16世紀の後半に至って、横岡の西に隣接する上志戸呂部落の北側の丘陵端に再び窯が築かれ、瀬戸・美濃窯と同類の施釉陶器が生産される。この時期、周辺にも同様の施釉陶器生産窯がみられる（大井川を狭んで、対岸の島田市神座窯、相賀窯）が、この上志戸呂窯を含めてそれら大窯期の志戸呂窯(群)と呼称している。

上志戸呂窯は、中でも最も大きな灰原を持ち、多様な器種の生産が行われていた窯であるが、最近、灰原部分の発掘調査が行われ、その生産品も明らかになってきた。平成元年の調査と、翌



第2図 金谷町上志戸呂古窯出土天目茶碗実測図 1~8 (上志戸呂1類)、9~14 (同2類)、15~19 (同3類)、20~22 (同4類)



第3図 金谷町上志戸呂古窯出土品(23~32)および同町横岡金谷地区表採品(33~35)、大徳寺什器天目茶碗(36、A~D)実測図；23~25(上志戸呂4類)、26、27(同5類)、28~32(同6類)

年の遺物整理に関係する機会があり、天目茶碗の形態変化を調べることができたので、その特徴と、変遷過程をまとめてみることにする。

第2図から第3図にかけてのNo.1～No.32が上志戸呂窯出土の天目茶碗である。これらは、その口縁形態と器形の全体、器体の厚みなどから6類に分類することができるが、大よそ3段階に変遷するようである。以下にその特徴を概述してみよう。

なお、注10文献では、天目茶碗をA～D類の4類に分類したが、時間的な変遷を加味せず、高台の作りの差と、釉調の違いから形態分類したにとどまった。それは、上志戸呂窯では、瀬戸・美濃窯と比較して、その出発時点を大窯Ⅲ期ととらえ、若干の遺物に新しい要素があるところから、大窯Ⅴ期まで生産が存続したことを推定したのであるが、その段階的な遺物の変遷について考察するに至らなかったためである。以下に述べる6類と、報告書でのA～D類の関係は、1類がA類、2類および3類の15～17と、4類、6類が、B類（輪高台）、5類がC類（掛け分け天目）、3類の18、19がD類（内反り高台）である。

○第1類（第2図1～8）

輪高台を削り出しているものの中で、体部が丸味をもち、かつ口縁部が巾狭ながら斜め上方に屈曲するグループである。口唇部外側は玉縁状に作る。器高はほぼ5.5cm～6.0cmだが口径に大小2種があり、10.5cm前後のやや小さいものと、11.5cm前後のものとの差である。なお口縁部の屈曲度とその巾に違いがあるが、体部の形状、器の大きさに共通性のある7、8もこのグループに属す。1～6が先の天目茶碗Ⅰ類、7、8が、同じくⅡ類にあたる。

このグループの口唇部の特徴である、口唇部外側を小さく丸めた玉縁状口縁と、丸味をもつ体部は、瀬戸・美濃大窯Ⅲ期の古い段階にあたる。

この類に属する天目茶碗の釉調は、黒褐色ないし茶褐色が多く、5、7は、一般に柿釉と呼ばれる光沢のある茶褐色を呈する。

○第2類（第2図9～14）

削り出し輪高台のもので、体部と口唇部に第1類との違いを見せる。すなわち、このグループは、体部がほぼ直線的に延びていき、一端、外方へ膨らみをもたせたのち、垂直に立ち上がり、斜め上方へ屈曲して先尖りの口唇部となるもので、屈曲度のきつい9～12と、ゆるく彎曲させる程度の13、14とがある。

このグループにも天目茶碗Ⅰ類、Ⅱ類の類別ができ、9～12のⅠ類と、13、14の口縁部の巾広に立ち上がるⅡ類とに区別される。

器高は、5.7～6.3cmと、大きな差はないが、口径に若干差がある。すなわち、10.5cmの9に対し、他はほぼ11.5cm前後である。

釉調は、第1類とあまりかわらず、黒褐色のものが多い。但し、焼成温度があがらず、マット状の光沢のない黄褐色を示すものもある。12は、柿釉調で、茶褐色の光沢のあるものである。

このグループは、大きさにおいて第1類とあまりかわらないが、体部下半が直線的で、口縁部へ移る膨らみが最大径となるため、器形全体が、扁平な感を受けるもので、瀬戸大窯Ⅲ期の月山窯（大窯3段階第5、6小期）に類似品がある。Ⅲ期でも新しい時期の生産品と考えられる。

○第3類（第2図15～19）

削り出し輪高台のものと、内反り高台の2種が含まれるが、体部が第1類と同様に丸味をもち

つつわずかに立ち上がりを見せそのまま斜め上方へ薄くひき上げた口縁部となるグループである。口唇部に特徴をもっていて、体部からひき上げてきた胎土を一気に薄くし先尖りの口唇部を小さく作っている。従って内面はゆるやかに彎曲を示すのに対し、外面は、半球の曲線の上端に鋭く屈曲した薄い口唇部がつく器形となっている。

器高は 6.0cm～6.2cm ほどだが、口径にばらつきがあり、10.3cm、11.0cm 前後、12.2cm と 3 種ある。

釉調は、黒褐色から黒色のものが多い。17は、焼成温度があがらず、融けずにマット状の黄褐色釉となっている。

19は、内反り高台で高さ 7.5cm、口径 11.2cm の大きさで、他のものと異質であるが、体部が彎曲すること、口縁部は体部からそのままわずかに外反気味に引きあげていること、18と同じ内反り高台であることなどから本グループに所属させた。天目茶碗Ⅰ類に 15～18、同Ⅱ類に 19 が属することとなる。

第Ⅰ類および第Ⅱ類の口縁部や体部の形状よりも新しいタイプと考えられ、大窯Ⅳ期の頃の生産かと考えられる。

○第Ⅳ類（第Ⅱ、第Ⅲ図 20～25）

第Ⅲ類と同様に丸味をもった体部をもち、やや内傾気味に立ち上がったのち斜め上方へ外反する口縁部をもつタイプと、内彎気味の立ち上がりからそのまま垂直方向へ口縁をひきあげるタイプの 2 種がある。前者が天目茶碗Ⅰ類であり、後者が同Ⅱ類である。

Ⅰ類に属するものが 20、21、23、24 であり、Ⅱ類に属するものが、22、25 である。Ⅱ類の器形は、第Ⅲ類の 19 とは大きく異なる外形を示しているが、Ⅰ類の外形は、第Ⅲ類と類似する。しかし、断面図でみるように内面見込み部の形態はまったく異なる。この第Ⅳ類の特徴は、Ⅰ、Ⅱ類ともに器壁が極めて厚いことと、底部の厚さも他の天目茶碗の 2 倍近くある点である。

大きさには、3 種類あって、器高 6.0cm 前後に口径 10.5cm のもの（20、23）、器高 6.2cm～6.7cm 口径 11.4cm 程の中位のもの（21、22）および、器高 7.0cm 前後に口径 12.0cm 前後の大形のものである。中形と大形のものに口縁が内彎しながらもほぼ垂直に立ち上がるⅡ類が存在するわけで、小形のもの、第Ⅲ類の小形のものとは外形は類似し、Ⅰ類だけである。

釉調は、黒色ないし黒褐色で、光沢のある発色を示している。但し一部に釉がとけ切らずに気泡をみせるものがある。

この部類のみ、なぜ器壁が厚いのかは不明であるが、この大・中・小の内法寸法は、第Ⅲ類の大・中・小の内法寸法とほぼ一致するところから、容量の規制のうえで、高さのみ大きくする注文に基づく生産であった可能性が高い。口径の小さい No. 20、23 の深さは推測が入るが、4.6～4.7cm ほどで、No. 15 の推定深さ 4.8cm と類似する。中形の No. 22 の深さは 5.2cm で、No. 16 (5.1cm)、17 (5.3cm) の深さと類似する。また、大形の No. 24、25 は、深さが 5.7cm を測るが、第Ⅲ類の No. 18 は、口径が 0.3cm ほど大きい反面、深さ 5.3cm とやや浅く、容量的には類似した大きさを示している。従って、この第Ⅳ類は、第Ⅲ類の口径の大きさが類似するものに対し、ほぼ 0.5～0.7cm、場合によっては 0.9cm も高く作っていると見られるのである。これらの底部の厚みは、実に 1.3cm～1.4cm もあり、手どりも重い。

他の部類と同じ容量に作りながら、外見を腰高の天目茶碗に作る理由は、おそらく茶法上の必

要から生じたものと思われる。禅宗寺院からの注文か、茶道を好む大名または豪商等からの注文か、天目台に乗せ台子飾りなどに使用したり、実際の喫茶の際に天目台の大きさと関連からこうした高さに製作されたものと思われる。

○第5類 (第3図26、27)

天目茶碗ではこの2点のほか小片が2点の合計4点、丸碗では1点という少量ながら、内面鉄釉、外面灰釉という掛け分け釉の製品である。

I類に属する26は、推定で口径10.0cm弱、高さ6.2cm程の体部に丸味をもつやや腰高な天目茶碗で、内面は黒色でやや先透性の鉄釉、外面は光沢のある黄緑色の灰釉が掛かっている。口縁は屈曲部分までの陶片のため、先端部が不明だが、第3類の小形品(第2図15)の如き斜め上方へ外反するタイプと考えられる。

口縁部がほぼ垂直に立ち上がり、先端部をあまり外反させず丸くおさめる、天目茶碗Ⅱ類に属する27は、口径12.5cm、高さ6.6cmを測る大形品で、第4類25の大きさと類似する。内面はやや光沢のある黒色釉、外面は透明性の強い光沢のある黄緑色の灰釉が掛かっている上志戸呂窯焼成品の中では群を抜いて美しい(写真1、2)。体部は丸味をもつ。

2点とも削り出し輪高台だが、底部の削り込みは上志戸呂窯天目茶碗中でも最も深く、高台断面を台形状にしっかりと作り出している。I類の口縁形態は、第3類15、第4類23と同類と推定され、Ⅱ類は、I類に属する第3類18(内反り高台)の大きさと類似し、口縁をゆるく内彎気味に作っている点の違いを示す程度で、器形の特徴から第3類、第4類と同時期の製作品とみなすことができる。



写真1 上志戸呂窯掛け分け釉天目茶碗(第3図27)



写真2 同上高台部

珍しい釉調のものだが、天目茶碗の器形全体に変化があらわれる段階に、これもまた、注文によって製作されたものかも知れない。特別に中国陶磁の新器種を模したものとも思われず、瀬戸・美濃地方における新しい釉調の出現に関係するものと考えられ、陶工の試作品とみることも可能であるが、No.27をみる限り、完成度の高いもので、製品として特定の場所へ供給されたものであろう。

第3～5類は、ほぼ同時期生産とみられ、第4類22、25にみられる直立気味の巾広の口縁をもつ大形のⅡ類の出現は、大窯Ⅲ期にはみられないものであり、時間的には、次の大窯Ⅳ期に併行する段階のものと考えられる。

なお、第3類のNo.19は、第4類、第5類の大形品よりもさらに器高が大きいため、次の第6類の可能性もなきにしもあらずであるが、No.18の内反り高台と同じ技法で高台を削り出しており、器形体部の丸味からみて、第3類

の中に位置付けざるを得ない。

○第6類（第3図28～32）

口縁部がS字形に屈曲するタイプは少なくなり、ゆるやかな屈曲度を示すものが目立つ程度で、天目茶碗Ⅰ類に属するものもNo.28～No.31のように、それまでのS字形ほどの断面を見せないけれども、体部から垂直に立ち上がったのち、ゆるく彎曲する口縁形態を示す。体部は直線的な雰囲気をもつ。口径10.0cm、11cm前後、12cmの大・中・小の大きさで、それぞれ高さが6.0cm、6.8cm、6.0cm強を測る。器の内部の断面は、角張った感じで底部の平坦な逆五角形に近い形状を示す。

これに対し、天目茶碗Ⅱ類の方は、体部が丸味をもって作られ、口縁近くで垂直に立ち上がり、そのままわずかに内彎しながら丸くおさめた口唇部に至るもので、No.32の1個体のみである。しかし、この形態がその後の天目茶碗の基本形態となるようで、口径11.6cmに対し、高さが7.4cmと長大な器形となっている。

Ⅰ類は、それまでのⅠ、Ⅱ類が合わさったような器形となり、新たなⅡ類が登場したと考える方が妥当なのかも知れない。とすればこの第6類のⅠ類は、前段階からの系譜でいけばⅡ類に、さらに第6類Ⅱ類は新たにⅢ類とすべきことになるが、他器種の整理、分類ができるまで保留し、その後の変遷とのからみから、当面は、前段階からのⅠ、Ⅱ類の系譜として扱うこととする。

この部類の天目茶碗の釉薬は、全体に光沢をもつ明るい黒色ないし黒褐色を呈していて安定した釉の発色をみせるようになる。

第6類の天目茶碗Ⅰ類は、美濃窯出土品と比較すると、体部の作りに若干、差があるが、口縁形態や大きさは大窯Ⅴ期の高根山窯(注12)出土の天目茶碗の中に類例を認めることができる。そして、Ⅱ類の形態は、瀬戸・美濃窯の登窯初期あるいは、これに併行関係にある大窯製品の中にみられる縦長な天目茶碗の初現的な形をとっている。従って、この第6類の製作時期は、美濃窯における大窯Ⅴ期、瀬戸窯における大窯第4段階8小期(注14)にあたるものと考えられる。

以上が上志戸呂窯出土の天目茶碗である。

(2) 上志戸呂窯製品の年代

天目茶碗各類の記述の最後に、瀬戸・美濃窯の大窯編年との比較から、その編年の位置を大窯Ⅲ～Ⅴ期という形で記述してきたが、改めて、以下にまとめてみる。

第1類の天目茶碗のうち、口唇部を玉縁状に作るⅠ類のタイプは、大窯Ⅱ期の天目茶碗の口縁形態を残しており、瀬戸市月山窯の古い段階（瀬戸大窯第3段階5小期(注15)）にあたる。器形は、瀬戸・美濃窯大窯Ⅲ期のものに比べひとまわり小さく、前段階の瀬戸窯の中に類品をみるが、Ⅱ類の大きさや、他器種の特徴から大窯Ⅲ期に属することは動かし難いようである。(注16)なお、静岡県引佐郡細江町の初山窯にも同時期に大窯製品が生産されており、4か所に窯跡が推定されているが、このうちの一基、釜下窯でもこのⅠ類が出土している。瀬戸・美濃窯よりやや小形で、上志戸呂窯と同じ大きさを示す。(注17)しかし、釜下窯では、底部の作りは大半が内反り高台で、輪高台がほとんどの上志戸呂窯とは、製作技法上の差を示している。この2地域には、ほぼ同時期に別々の陶工集団が入って窯業生産を始めたものと考えたい。なお、釜下窯では第3類以降の天目茶碗の出土はない。

第2類は、体部が直線的になった器形で、口縁端部に第1類のⅠ、Ⅱ類と違いをみせるもので、

全体の大きさでは第1類との差をみせない。I類がやや扁平な形状となり、II類が明瞭に区別できる直立気味の口縁となる点で大窯Ⅲ期でも後出のものとみられる。

第3類から第5類については、体部の丸味や口縁形態に類似点をもちながら、高台成形の差や器壁の厚さ、釉薬に違いがあることから3種に分類したもので、天目I類、同II類ともそれぞれの部類に存在する。特にII類は高さを増し、縦長な器形となる。器形の変化が見られることから、1～2類に比べより新しい時期の製作と考え、大窯Ⅳ期に併行する時期の生産とした。

なお、大窯Ⅲ期にあたる月山窯には、この第3類、第4類中の天目II類が生産されているが、天目I類が月山窯になく美濃窯において大窯Ⅳ期に生産されている器形に類似していることから大窯Ⅳ期とした。^(注18)

第6類は、前述のⅣ期の天目II類の口縁部が、ゆるやかに外反するような天目I類と、同じくⅣ期の天目II類をもっと縦長な形とした天目II類の組合わせで、美濃窯では天目I類の口縁端部が強く外反する形が大窯Ⅴ期の典型となる。おそらくこれを最後に上志戸呂窯は閉窯する。大窯Ⅴ期の段階と推定される部類の天目茶碗である。

以上を要約すると、第1・2類が大窯Ⅲ期、第3～5類が同Ⅳ期、第6類が同Ⅴ期に編年付けられるということである。そして、それらは、瀬戸・美濃窯で年代推定されているものとほぼ一致する。但しこの間の年代設定については若干異論があり、井上編年のⅣ期1580～1585年、Ⅴ期1585～1605年、藤沢編年のⅣ期(7小期)1590～1600年、Ⅴ期(8小期)1600～1610年と、大窯Ⅲ～Ⅴ期の年代に微妙なくい違いをみせている。今後志戸呂窯製品の年代決定資料の発掘と検討を重ねることとして、今回は、1570年～1610年の年代幅を単純に均等3期に分け、大窯Ⅲ～Ⅴ期に相当する上志戸呂窯製品を、上志戸呂I～Ⅲ期ととりあえず呼称することとしたい。従って、第4図の天目茶碗変遷図中、志戸呂窯側の時期区分を、窯名ないし窯の集中する地区名で呼称することとした。

3. 江戸期の志戸呂窯製天目茶碗

さて、上志戸呂窯の閉窯の理由は判らないが、志戸呂窯はその後、横岡村釜谷地区の台地端を利用して連房式登窯の段階へ移るようである。その後の天目茶碗もこの釜谷地区の窯跡から採集されているほか、伝世品も知られている。それらの検討から器形変遷をたどってみることとする。

(1) 横岡釜谷地区の表採品

○第3図33は、釜谷地区の採集とのみ伝えられるだけで窯跡が特定できない資料であるが、ほぼ完器で、天目茶碗の変遷を考える上で見逃せないものである。本資料は故鈴木幸朗氏から寄贈された当館館蔵資料である。

口径11.3cm、高さ7.5cmの縦長な天目茶碗で体部を直線的に作っている。口縁は垂直に立ち上がり、ゆるく内彎して斜め上方へひき上げた口唇部となる。底部は、直径4.2cmの削り出しの浅い輪高台で、胎土はきめの細かい均質な様子が露胎部からうかがえる。

上志戸呂窯第6類にみた縦長な天目II類の口縁部をさらに内彎させた形で、大窯末期からの形態をうけついで誕生した薄手の均整な登窯期初期の天目II類とみることのできる資料である。鉄釉であろうが、釉は融けずに、かせた黄褐色の荒肌を内外ともみせている。

瀬戸市赤津B窯(大窯・第9小期)にみられる天目茶碗と同様の器形と器種の薄さを示している。^(注21)

て、登窯が登場した段階の大窯製品と酷似している。おそらく釜谷地区に築窯された連房式登窯の製品で、口縁のくびれの少ない天目Ⅱ類とみることができる。おそらく、器高の低い口縁がやや外反する天目Ⅰ類も製作されていたと思われる。

○第3図34、35は、横岡釜谷在住の鈴木路雄氏所蔵の採集品で、釜谷中窯または新兵衛窯の灰原からの出土品という。^(注22)

34は、口径11.1cm、器高7.0cm、底径4.9cmを測り、深い輪高台を削り出している。体部は、底部辺で若干丸味をもちながらもほぼ直線的にのび、垂直に立ち上がってのちやや内彎をみせ斜め上方へ外反させる口縁となる。外反形態から天目Ⅰ類の系譜にあるものと考えられる。

35は、口径11.1cm、器高8.1cm、底径4.4cmの一段と縦長となった器形を示すもので、やはり深い輪高台を削り出している。体部は底部近くを丸く、それ以上は直線的に作り、垂直に立ち上がる巾広の口縁部となる。口縁はわずかに斜め上方へひき上げるのみで、天目Ⅱ類の系譜に位置付けうる形態を示している。

胎土はともに緻密で灰白色を呈し、釉際に赤色がでている。釉調は黒褐色で、半透明のにぶい光沢を発しているが、焼成温度が高ければ黒色の透明性の強い発色となったと思われる。底部近くまで施釉される。

形状と高台の削り度合いから、Na33の後段階に位置付けられるものと思われる。

(2) 大徳寺什器の志戸呂窯製天目茶碗

愛知県陶磁資料館収蔵品^(注23)には、京都・大徳寺什器と伝える天目茶碗9個と、天目台10個がある。天目台は同一製作とみられる朱漆塗に黒漆で雲文を散らしたものの5個と、簡単な朱漆塗のもの5個からなり、ほぼ同一時期の製作品とみられる。

さて、第3図36が、9個の天目茶碗の中の1つで、志戸呂窯製である。口径12.8cm、高さ6.8cm、底径4.3cmを測る大きさのもので、体部を丸く作り、そのまま口縁を強く外反させる器形である。口径が大振りな天目Ⅰ類の系譜をひく茶碗で、底部は輪高台を削り出している。高台内面は、斜めに削られたのち、なで仕上げしているため、内反り高台のような断面を呈している。高台内中央から左にかけて「竜光」の二文字が墨書されており、大徳寺塔頭・竜光院と何らかの関係のあった天目茶碗であることを物語っている。

釉薬は、鉄釉であるが、登窯期以後顕著になる茶褐色から黄褐色の釉調で、釉層のうすい部分では、色に濃淡の斑状をみせる。これも比較的深く施釉されている。

さて、この天目茶碗の製作時期であるが、先にみた窯跡出土例とは器形、釉調とも一致しない。そこで、同一箱内に納められた他の8個の天目茶碗を検討してみることにする。他の天目茶碗は、すべて瀬戸・美濃製で、その特徴は、第3図下方のA～Dの4種に集約される。

8個の天目茶碗の形態は、Aタイプが1点、Bタイプが3点、Cタイプ（高台内を斜めに削る）1点、Dタイプ3点である。このうちAタイプは、口径12.0cm、器高6.7cm、底径4.8cmの大きさで、口縁端部は、真鍮の覆輪が掛けられていて細部が不明である。しかし、体部を丸く作り、直立気味に立ち上がる口縁となり、やや内彎させたのち、わずかに外反させた丸い口唇部になると考えられる器形である。この器形は、大窯Ⅴ期にみられる美濃窯製品で、高根窯沢窯や由右衛門窯などに類例が認められる。釉調は茶褐色を呈し、口縁近くの内外面に黒褐色釉が流れる。^(注24)

Bタイプは、口径11.4cm、高さ7.4cm、底径4.6cmの大きさで、口縁下の立ち上がり部分がく

の字状に内傾する。口唇部は、直角に近く外反するが、先端部は真鍮覆輪のため不明である。おそらく丸くおさめるものとみられる。釉調は黒色釉で、光沢があり、黒色の釉中には、茶褐色の禾目風の縦縞が内外にあらわれている。胎土は緻密で硬く焼き締まっている。瀬戸窯の中の穴田窯出土品および大窯11小期のサカイ窯に類品が認められる天目茶碗で、この頃には、天目Ⅰ・Ⅱ類の形態差はなくなり、単に器形の大小に違いをみせる程度となっている。美濃窯登窯Ⅲ期ないし瀬戸窯大窯11小期・本業第1段階第3小期の時期にあたる。

Cタイプは、口径11.8cm、高さ8.1cm、底径4.7cmの大きさで、口縁の立ち上がりはBタイプよりゆるやかなく、字状の内傾をみせる。口唇部はやはり真鍮覆輪のため不明であるがわずかに外反して口唇部を丸くおさめるものとみられる。底部高台の作りに特徴があり、輪高台の内側を斜めに削り、底部になだらかにつながっている。釉はやや光沢の乏しい黒色釉で、釉中には暗茶褐色の斑点が細かく認められる。胎土はBタイプと同様、緻密なものである。

Dタイプは口径11.8cm、高さ8.4cm、底径4.6cmの大きさで、Cタイプと同程度の段をなす口縁を有するものである。口唇部は、やはり真鍮覆輪のため不明だが、Cタイプよりややきつく外反し、丸くおさめるものと思われる。釉調は光沢のある黒褐色釉で、内外に縦縞状の茶褐色釉が黒褐色釉層中にみられる。特に内面口縁部には全体に茶褐色を呈するほどになっている。Cタイプとの違いは、輪高台の様子で、こちらは、方形に削り、底部内面も、腰高に削り出している。胎土はB、Cと同じ灰白色ないし黄灰色の硬質なものである。この天目茶碗の底部内面の中央には黒褐色の漆で、「瑞源」と書かれている。「瑞」字は半分ほど漆が剥落している。

このC、Dタイプは、共に美濃窯登窯Ⅱ期、瀬戸窯大窯10小期、本業第1段階第2小期に属するものである。

このように大徳寺什器の志戸呂窯製天目茶碗に伴っている瀬戸・美濃窯製の天目茶碗は、大窯Ⅴ期から登窯Ⅲ期にまで渡る製品で占められている。登窯Ⅲ期以降のものは含まれていないことから、17世紀後半までのものといえることができる。志戸呂窯天目茶碗は、窯跡出土品との比較において、後出的なものであり、登窯Ⅲ期併行期のものといえそうである。

(3) 志戸呂窯製天目茶碗の江戸期の変遷

4点の志戸呂窯製天目茶碗の検討の結果、これらはほぼ3時期にわたるものと考えられ瀬戸・美濃窯での編年観との対比によって、17世紀の第1～3四半期に編年的位置があたえられよう。

この時期、志戸呂窯の陶工集団は、横岡村釜谷の地区に移住しており、南から釜谷南窯、内藤窯、釜谷中窯、新兵衛窯、釜谷北窯、ほろん沢東窯、やや東にはずれて土山原窯の7基の江戸期の窯跡が確認されている。このうち、内藤窯、釜谷中窯、新兵衛窯の3期に江戸前期の遺物が認められる。従って、釜谷集落のある台地の西側斜面に築窯された、おそらく連房式登窯で、これら天目茶碗が焼成されたと考えられる。従ってこの3期の段階を横岡Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ期と呼称することとする。

なお、大徳寺の塔頭、竜光院にも、志戸呂窯製天目茶碗があり、当館の所蔵品より古い様相をもっている。口径13.0cmの大きさで高台内には「龍」の字の墨書がある。ここには、「瑞源」と体部下方に墨書された瀬戸・美濃窯製の段付天目茶碗もあり、当館所蔵品が、竜光院蔵品の一部であった可能性が極めて高いことを示している。

4. 志戸呂窯での施釉陶器生産の背景

以上、天目茶碗の型式変化から、その生産時期の特定と、編年表作成（第4図）を試みたが、比較を瀬戸・美濃窯にとった点で大窯から登窯への変化にやや難がある。今後、資料の増加に伴い、再検討を必要とするかも知れない。しかし連続的の変遷と器形変化の大筋はかわらないと思う。

最後に、志戸呂窯の生産を支えた背景について言及しておく必要がある。

かつて、初山窯を大窯Ⅱ期後半、上志戸呂窯を大窯Ⅲ期とし、それぞれの生産背景に戦国大名の経済政策として有力家臣団が関与したことを想定した。15世紀段階の三ツ沢窯の場合にも直接管掌したものとして志戸呂城主を考えた。しかし、これには流通範囲と、築窯地域からみて反論もある。整理して、志戸呂窯全体についても考えてみる。

初山窯については、時期認定について批判があり、ひだ皿、仏花瓶の存在等から、指摘どおりⅢ期前半（第5小期）と訂正する。しかし上志戸呂窯については、天目茶碗の検討からは、初山窯と同時期に生産を開始していたと考えられる。従って初山窯工人集団が、志戸呂窯に移って開窯したとする説はあたらぬ。その後初山窯工人が志戸呂窯地区へ移住したことはあったかも知れないが、初山窯は短時日のうちに窯の火を消した。これに対し、上志戸呂窯は、天正16年の朱印状に示される如く、徳川家康によって焼物商売を免許され、保護された。しかし、家康によって初山窯工人が上志戸呂窯へ移動させられたとする根拠にはならない。

この中世末から近世初期の窯業形態について、吉岡康暢氏は、各窯業地の実態を検討する中で、近世窯業への移行は様々な形態があり、窯業地によって違いがあることを指摘しながら、東濃窯（美濃窯）の施釉陶生産については、次のように推論している。

窯跡の広域分散型分布状況は、国人層の統治領域を越えた膨張を遂げていることから、国人層は営業税賦課のレベルにとどまったのみで、実際は、村落領主層こそ窯業生産の直接の管掌者であったと考える。さらに、これと結託する問屋商人こそ瀬戸系施釉陶器工人の移住と関わりをもちつつ、流通機構の再編成を推進したと捉えられた。

一方、織豊系城郭の研究から前川要氏は、織豊系城郭の進出現象とこれに伴う地域支配の結果、瀬戸・美濃窯生産技術の地方伝播が起りうるとし、越中瀬戸窯および志戸呂窯には、それぞれ前田・徳川による保護政策がとられたとした。

このように、直接の管掌者については意見の分かれるところであるが、特に越中瀬戸窯、志戸呂窯は、江戸期を通して生産が継続される地域であり、近世窯業生産形態への連続を考えなければならない。遠江・初山窯、信州・飯田市尾林窯といった大窯製品生産窯を含めて、その立地を見ると、戦国期の各戦国大名が活動する範囲の本貫地への街道ルートに立地する共通性がある。確かに流通ルートを開拓する商人の存在が大きな要素ではあるが、搦鉢・丸皿といった日常雑器に近い製品の生産には、単なる村落小領主ではなく、一定の流通範囲を確保し、自らの経済基盤とする戦国大名支配下の家臣団を推定したい。上志戸呂窯とその周辺の窯跡については、それぞれの窯での生産品の精細な検討作業を経たうえで推考していきたい。

なお、上志戸呂窯出土品は、1989年、金谷町教育委員会で実施された灰原調査の際の出土品である。一部はその発掘調査報告書に掲載されたものであるが、未掲載のものが18点ある。すべて金谷町教育委員会保管中のものであるが、今回の検討資料に使用させていただいた。将来、金谷町史に掲載予定のものである。

	(期) 瀬戸・美濃窯 天目茶碗			(期) 志戸呂窯 天目茶碗	
	I	II		I	II
(菊畑)			三ツ沢		
1500					
1550					
			上志戸呂Ⅰ期		
			上志戸呂Ⅱ期		
1600					
			上志戸呂Ⅲ期		
			横岡Ⅰ期		
			横岡Ⅱ期		
1650			横岡Ⅲ期		

第4図 天目茶碗変遷図；瀬戸・美濃窯は注3、注5文献実測図を引用。1.2は菊畑窯、3.4は小金山窯、5.6は昔田窯、7.8は日向窯、9~12は月山窯、13.14は土岐市定林寺東洞1号窯、15.16は土岐市高根窯沢窯、17.18は赤津B窯、19.20は欠下窯、21はサカイ窯。志戸呂窯は、第1~3図に掲載。1.2は三ツ沢窯、3~12は上志戸呂窯、13~15は横岡釜谷地区採集品、16は大徳寺什器。

(注)

- 注 1. 美濃古窯研究会編『美濃の古陶』 光琳社出版 1976
- 注 2. 『静岡県埋蔵文化財年報』静岡県教育委員会 1989
- 注 3. 『愛知県古窯跡群分布調査報告Ⅳ—瀬戸・藤岡—』 愛知県教育委員会 1985
- 注 4. 伊藤稔『愛知県藤岡町笹窯発掘調査報告』 藤岡町教育委員会 1983
- 注 5. 藤沢良祐「瀬戸大窯発掘調査報告」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要Ⅴ』 瀬戸市歴史民俗資料館 1986
- 注 6. 注 3. 第32図および『瀬戸市史』陶磁史篇二 1981 図 84
- 注 7. 注 3. 第33図および『瀬戸市史』陶磁史篇二 1981 図 82
- 注 8. 赤塚幹也「瀬戸陶磁史」『瀬戸市史』陶磁史篇一 瀬戸市 1969
- 注 9. 藤岡一「宋の天目茶碗」『世界陶磁全集12』 宋 小学館 1977
- 注10. 『静岡県金谷町 上志戸呂古窯跡発掘調査報告』 金谷町教育委員会 1991
- 注11. 注 5 に同じ。
- 注12. 榑崎彰一・伊藤嘉章他『高根山古窯跡群発掘調査概報』 土岐市教育委員会 1984
- 注13. 美濃古窯研究会編『美濃の古陶』編年表 光琳社 1976 および井上喜久男「美濃窯の研究(一) — 15～16世紀の陶器生産—」『東洋陶磁』第15, 16号 1988
- 注14. 注 5 に同じ。
- 注15. 藤沢良祐、注 5 文献および井上喜久男、注13文献を対照させ、志戸呂製品との比較の上で、瀬戸・美濃窯天目茶碗編年(第 4 図左側)を作成した。主として藤沢編年表(注 5 文献 P 279、表18、大窯編年表⁽²⁾)を軸に、天目Ⅱ類を加え、段階を井上編年表(注13文献その他)に合わせた。但し後半の年代は、両者に若干の違いがあるので私見とした。
- 注16. 注 5 文献中の瀬戸市下半田川・日向窯。
- 注17. 『初山焼釜下古窯発掘調査報告書』 細江町教育委員会 1985
- 注18. 注13. 井上論文中の山の神窯など。
- 注19. 井上喜久男「尾張陶磁(1)—近世初期の瀬戸物生産—」『愛知県陶磁資料館研究紀要 9』 1990
- 注20. 前川要「織豊期における瀬戸・美濃窯生産技術の地方伝播」『美濃の古陶』 美濃古窯研究会会報 No 3 1989
- 注21. 注 5 文献に同じ。
- 注22. 『静岡のやきもの』 愛知県陶磁資料館企画展図録 1988 No.109 以下釜谷北窯出土とあるのは、中窯ないし新兵衛窯の誤まり。
- 注23. 『愛知県陶磁資料館所蔵品図録』 愛知県陶磁資料館 1988 P 342 No.795
- 注24. 注12文献および注13井上論文。
- 注25. 藤沢良祐「本業焼の研究⁽²⁾」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要Ⅶ』 1988
- 注26. 注 5 文献に同じ。
- 注27. 注 1 文献。最近、編年観が整理され、連房Ⅱ(近世第 3 段階)田ノ尻窯式期にあたる。榑崎彰一「近世美濃窯の変遷」『尾呂』 瀬戸市教育委員会 1990
- 注28. 注 5. 注25文献に同じ。
- 注29. 小山富士夫『天目』陶磁大系38 平凡社 1974 グラビア図版 136. 137. 瀬戸・美濃窯製は、134. 135。

- 注30. 「瑞源」は明治維新の際、廃仏棄釈で廃絶した塔頭「瑞源院」。(『龍寶山大徳禅寺世譜』 思文閣出版 1979)
- 注31. 注22文献、巻末解説「静岡のやきもの」初山焼の項。
- 注32. 注22文献、志戸呂焼の項。
- 注33. 吉岡康暢「東日本における中世窯業の基礎的研究」 国立歴史民俗博物館 1989
- 注34. 注20文献に同じ。
- 注35. 注20文献に同じ。
- 注36. 注32文献に同じ。
- 注37. 注20文献に同じ。